

## システム・エンジニアとして10年、障害者仲間の養成にも奮闘

報告：竹田 保さん ティーエスデー株式会社小樽システム開発センター  
兼小樽国際ソフトウェアセンター開設準備室係長

先日（3月7日）、筋ジストロフィーの障害をもちながら、ティーエスデー株式会社（本社：東京 以下、TSDと略）でシステムエンジニアとして働いている札幌市在住の竹田保さん（31歳）が、神戸に立ち寄られ、福祉関係者・コンピューター技術者・パソコン通信関係者が集まり、お話を聞く機会がありました。講演の概要を紹介します。

### ○自力で、コンピューター会社に就職○

はじめまして、竹田保と申します。私は、北海道南部にある函館市の隣の木古内町の生まれです。現在、妻と二人で札幌市の身体障害者用住宅で暮らしています。障害は、筋ジストロフィーで、電動車いすでの生活をしながら、システムエンジニアとして働いています。

本題に入る前に私自身のコンピューターとの出会いについてお話しします。養護学校高校部卒業後、実家で両親と暮らしていましたが、12年程前、NHKテレビで、アメリカIBMの特集がありました。社員の中に車いす障害者がたくさんいて、他の社員と同じように働いているのを見たときに、障害があろうとなかろうと、能力さえあれば、コンピューターを勉強すれば、自分も可能性があるのではないかと思ったわけです。

そこで当時、北海道で唯一、コンピューターを授産科目としていた、岩見沢市の重度身体障害者授産施設岩見沢緑成園に入所しました。ただ、私の場合は障害が重度でしたので、授産施設に併設されている身体障害者療護施設への入所となりました。でも私は、あくまでも一般企業への就職が目的で施設に入りましたので、授産施設で、1年間、コンピューターの勉強をさせてもらいました。その後、「アルバイト・ニュース」を買い、片っ端から電話をして自分を雇ってくれる企業を探しました。

百社以上も電話をして、たまたま見つかった従業員10名くらいのコンピューター会社は、古い建物の2階に事務所がありました。その時社長は、「階段があるが、君はどうやって通勤するんだ」と言われたのです。このとき私は、たまたま西ドイツ製（だったと思うのですが）の階段を上る車椅子のことが頭に浮かびました。そして社長に「階段を上れる車椅子を買う予定ですからそれまでは階段をおぶってくれ」と頼み、それを買うことを前提として就職がOKとなりました。もちろん、実際は買いませんでしたが・・・これが、最初にコンピュータ業界で働き始めたときの話です。その後、3社ほど転職して、現在のTSDに来まし

た。転職はしましたが、おかげさまで、退職した会社の方々とも、今でも仕事の面でおつきあいさせていただいています。

### ○プログラマー養成講座を手弁当で開催○

5年前、札幌市で重度身体障害者就労推進委員会を結成し、障害者でもコンピューター関連産業で働いていけるのではと考え、友人のコンピューター技師、福祉関係者等と一緒に手弁当でコンピュータープログラマー養成講座を週2回、1年間にわたり開きました。

このことは北海道新聞でも紹介され、予想以上の反響がありました。札幌市から300km以上離れた北見市や紋別市等全道から、18歳から63歳迄の計55名の応募がありました。

ただ、私たちはボランティアでしたから金銭的な問題がありました。無料で借りることになっていた福祉団体の会議室のスペースの都合もありました。これらの条件から、現状のスタッフで対応可能な範囲に絞り、22名を試験と面接で選考しました。

養成講座では、まず最初にコンピューターの基礎知識として、ハードの基礎的な知識、ソフト・ウェアの歴史、コンピューターの概要等について約1カ月勉強しました。次に、ターゲットに絞ったのが事務経理のソフトでしたので、簿記を2ヶ月間、勉強してもらいました。6月には簿記の試験がありました。商工会議所の方をお願いしまして特別に福祉センターに試験会場を設けて頂き、22名が受験し、簿記3級に19名が合格しました。

簿記が終わってから、翌年の2月まで週2回、COBOLを勉強して頂きました。途中、11月にはコンピューターの情報処理試験があり、2種に、2名が合格しました。最終的には22名のうち最後まで受講して頂いた方は11名でした。

1年後、技術的にはある程度マスターできました。しかし、就職活動の方では、コンピューター関連企業や、私の個人的に知ってる会社に働きかけましたが、コンピューター関連の会社には一人も就職出来ませんでした。



誤解しないで頂きたいことは、就職出来なかったのは適性がなかったということではありません。特に、情報処理試験2種の試験に合格した2名は、かなり高い適性を持っており、実力もありました。しかし、彼らでさえ当時は働くことができませんでした。今は少し変わってきましたが、当時は適性や実力があってもコンピュータ業界自体が、障害者に対する理解がほとんどなかったためです。

なお、講座を卒業した11名の現在ですが、2名が体調不良のため自宅療養しております。それ以外の9名のうち7名が就職しています。残り2名は後ほどお話しします小規模作業所の方にいますが、その2人も就職が内定しており近々就職する予定です。

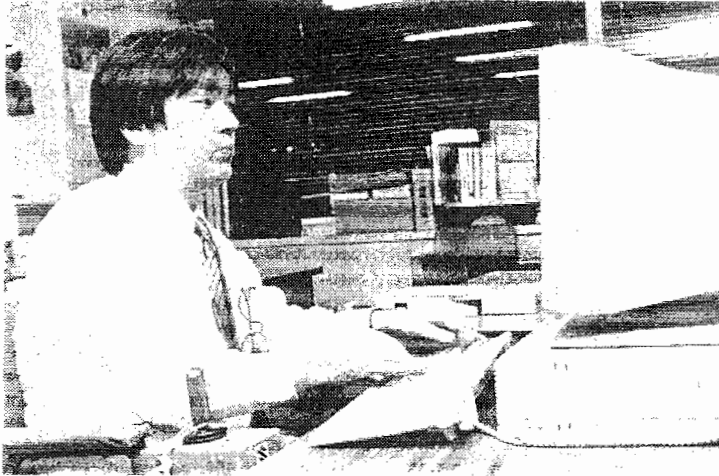
### ○小規模作業所でコンピューターソフトを開発○

一般企業への就職がダメなら自分達で職場を作ろうと、札幌市からの小規模作業所補助金を利用して小規模作業所「北海道オフィスプロダクツ」を札幌市内に設立しました。業務内容は、コンピューターのソフト開発、講演会等のテープ起こしとワープロによる浄書でした。仕事は、私の関係する会社からいただいたり、北海道庁や社会福祉協議会等の福祉団体からも仕事を受けました。

正直言ってむずかしい問題は、結構あります。例えば、健常者のスタッフがないため、介助や冬の除雪の問題でも苦労しました。朝、事務所にくると、雪が30cmも40cmも積もっていて駐車場が使用できなかつたり、玄関にたどり着けなかつたりすることもありました。これらの問題はボランティアや友人に協力してもらいながら解決し、なんとか運営を続けましたが、結構綱渡りの状況でした。

また、最初に男性の介助者を雇いましたが、コンピューターの知識はなかったので、介助以外の仕事がなく、十分に活躍してもらえなかつたのが実際です。

このような背景から、現在は小規模作業所のメンバーが作ったプログラムだけで運営していくのは不可能です。私が、本来の仕事を終えてから、夜、プログラムやシステムを作り、資金を捻出すると同時に、関係機関との顔つなぎ等のマネジメントをしているというような現実です。小規模作業所や会社形態にしても、活動をバックアップする技術者、マネジメント能力のある人に、専従または専従に近い形で、かかわってもらうことが成功の鍵だと思います。



《職場でコンピューターに向かう竹田さん》

### ○TSDが障害者雇用を開始○

今、私が勤めているTSDは、札幌市と小樽市（札幌市の隣）の事務所で障害を持った人間が11名働いています。といいますのは、小樽市に400人規模の小樽国際ソフトウェアセンターを設置する計画をすすめており、私自身や各方面

からの働きかけもあり、20名程度の障害者を特別に入社させようということになったからです。

その内、コンピュータープログラマー養成講座・北海道オフィスプロダクツを経て、TSDに就職した障害者は5名です。その他に、福祉施設職員を経て、北



海道オフィスプロダクツで介助をしていた女性が介助職でTSDに就職しました。TSDでは、北海道オフィスプロダクツからの5名を含め、全員を3年間の予定で再教育しており、養成講座で学習したCOBOL以外の言語の学習もしてもらっています。5名の障害の状況は、血友病1名、頸髄損傷2名、脳疾患1名、多発性硬化症1名です。小樽国際ソフトウェアセンターでは、障害者用社宅を一般社宅とあわせて建設しており、介助職の社員は職場だけでなく、日常生活の面でも障害者を支援することになっています。

TSDが採用した障害者は、現在はまだまだあまり戦力になっていませんが、技術的な問題以前に、社会的常識がなく問題となるケースもあります。施設等での生活が長く、社会との接点が少ない障害者は、会社の中でも社員とあまりいい関係を築いていけないという例です。また、俗に言う「突発休（突然に休むこと）」が発生しても”障害”や”病気”があるのだから、ある程度許されるのではないかという意識が障害者にあるのも事実です。今は、そのような問題を会社の中でどう解決していけばいいのか、試行錯誤している状態です。

私を除いて管理職は全員健常者です。だから管理職が障害者（社員）に対して注意をしなければと思うことも、差別的な発言にとられないかと心配してしまいます。障害者・健常者の別なく本来、注意しなければいけないようなことに関しても注意できないこともあります。ですから、私を含めて障害者側も会社の一員としての訓練をしていかないと結果的には、障害者が弾き返されるような現実に直面するのではないかと感じています。

また、コンピューターというと、在宅勤務の可能性についてよく言われます。しかし、私の個人的な意見ですが、社員として在宅勤務を条件に雇用するには現実にはかなり難しいですね。例えば、コミュニケーションの問題です。場所が離れている中でどのようにして、社員同士のコミュニケーションを保っていくのか。技術的サポートをどう進めるのか。課題は多いですね。

## ○要求される質の高いソフトづくり○

障害者は、コンピューターをすることに適性があるとよく言われます。しかし、これはあくまでもコンピューターに適性を持っている方が、障害を持っている場合に限っては可能だという事で、障害者がコンピューターという仕事に適性があるということではありません。そのあたりが誤解されているようです。企業の側にも、ある意味で錯覚があり、障害を持っていれば健常者よりも適性試験が劣っていても、なんとかやっていけるんじゃないかという意識も今だにあるようです。

しかし、そういう意識で障害者を雇用した企業は北海道にも何社かありましたが、どこも失敗しています。

私達もプログラマー養成講座を開く際、適性試験を行いました。試験の結果は一つの参考になると思います。試験の内容は、数学は2次方程式等、英語は中学2年生程度の問題でした。成績のあまりよくなかった方は、今でも仕事の中で苦労しているというのが実情です。



実際、コンピューターの仕事は半年が一つのサイクルとされており、どんどん新しい知識が必要とされるんです。一つの仕事が終わって、次の仕事にとりかかる時に、そのために必要な知識を覚える期間というものは1週間ぐらいしかないのです。ですから1週間以内に新しい知識をつけ、それを理解する能力も必要になってきます。解説書を単に読むだけではいけないのです。

コンピュータ業界は非常に人手不足だと言われていています。しかし、これはあくまでもシステム・エンジニアが足りないということであり、プログラムを組むだけの人が足りないということではありません。特にバブルが弾けて、ソフト業界も花形産業ではなくなりつつあります。今は、コンピュータ業界でもより質の高いソフトを作れる人間が要求されてきています。

ですから、ずば抜けた才能を持っていれば別ですが、ふつうの障害者が就職しようとするとき、技術と同時にどう自分をセールスするかということがポイントとなるでしょう。

例えば、「通勤はどうですか?」と聞かれた時に、正直に「車で通勤しなければ通勤出来ない」とか、「自信がない」とか言ってしまったら多分、面接担当者は非常に不安を覚えるでしょう。障害者を雇うということでは、どの企業も不安はあるわけですから、障害者が働きたいと考えた時には相手の不安を自分が取り除いていくんだという姿勢が必要でしょう。

ただ、障害者自身が自分をどう売り込めるか、あるいは障害者自身、技術は持っているが自分では売り込めない時に企業にその人を売り込める人がいるか。技術とセールスの両方をもっている障害者は非常に希だと思えますから、障害者を支援する組織が、この2つを持っていていれば有効だと思います。

### ○常に自分の能力を生かせる仕事を見つけることが大切○

私の場合、キーボードを10分間打つと指がほとんど動かなくなります。そういう意味で、身体的な面でのジレンマはありますが、私は割り切って、そういう時はいかに動ける人間を使うかというふうに考えます。例えば、新入社員を見つけては「お前らの勉強のためだから横に着いて教えてやるぞ。」と言いながら自分の代わりにキーボードを打たせたりしています。

このように、障害が進行しても、ある意味では自分の能力を生かして企業にとってプラスになることが何かあると思うんです。そういうことを一人ひとりが見つけることです。例えば、仕事の中にはマネージャー的な仕事があると思います。自分が全く動かなくても、他人を動かして仕事をしていく、なんていうのは障害者に一番向いてるはずなんですよ。そのためにはマネジメント能力をもつことも必要ですが。

私自身は、「今日、明日、取り合えず働ければいいかな」とか、「今やってる仕事を取り合えず終わればいいかな」といった感じの繰り返しで今日まで来ています。もちろん家族のことも考えてはいますが、「石にかじりついてでも、企業で働き続ける」というつもりはありません。それでも、3、4日会社に泊まり込みで仕事をすることもあります。会社から道庁まで(500m程)、電動車椅子で行くと、冬には頭の上に雪が1cmくらい積もったり、急に雨が降り出し、ずぶぬれになることもあります。医者からは「そんなことしてると死ぬよ」と言われもしますが、調子が悪い時は悪い時で、その時また考えればいかなど、そんな生き方をしています。

### ○仕事をどういう観点でとらえるか○

もし、身体障害者職業訓練校等の公的機関が、10年前にコンピューター技術者の養成が行っていれば、今ごろこの業界には障害者があふれるくらい就職していたはず。しかし、公的機関はこれからの花形産業が何であるかということが見通せない。実際、今でも縫製などをやっていますが、現実問題としてそんな時代じゃないですよ。いつまでも同じことを職業訓練としてやっているから、ますます障害者は社会から取り残されていくんだと思います。

コンピューターに限らず、1カ月間食っていけるという観点で考えると、対象者はごく限られてしまいますし、それだけ考えていけば結果的に可能性の芽をつんでしまうと思うんです。

仕事をどういう観点で捉えるかによりますが、例えば1カ月間の生活を支えるだけの経済的な裏付けをするための仕事量として捉えると、ハンディというのが知的障害だけでなく身体的な障害もかなり重荷になると思うんです。1日分の経済的な裏付けをする為の仕事量を1カ月かかってやってもいいと思うんです。1日が無理なら1時間分、或いはその日の昼食分、もっと極端に言いますと煙草一つ、1カ月かかって煙草一個買えるということも可能だと思いますね。

ただ、いくら適性があるといってもコンピューターだけに変にこだわるのではなく、自分が持っている他の知識を活用して、違う方向で仕事をしていける可能性についても常に考えておいた方がよいと思います。コンピューターをするにしても、さらに土木の知識がある、経理の知識があるとなると、セールスもしやすいですね。コンピューターだけの知識なら、専門学校を卒業した健常者がたくさんいます。同じことを障害者がやってもかなわないですから、付加価値の部分でどういうものがあるのかということを考えておく必要があるでしょう。

(報告者: K A M E、松坂)